

女性旅行家B・M・エリアーシヨヴァーと日本女子大学校（一）

——一九一三年の大橋広との出会いと交流をめぐって——

一、近代日本の女性教育の国際的イメージ

近代日本社会の他の面と同様、女性教育が、西洋の影響によりもたらされた近代化が加速化していく一九世紀末から目覚ましい発展を遂げていったということは、よく知られた事実である。しかし、同時代の西欧や米国で、浮世絵や着物、漆器などの美術品が憧憬の的となっていたのに対して、あくまでも発展途上国に位置付けられ、対等なパートナーとして接せられることのなかった日本の同時代の事情について報道されることは比較的少なかった。女性教育の諸問題もまた多くの西洋人の関心を引くことはなかったと思われる。しかし、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての西洋の新聞雑誌をみると、ひじょうに早い時期にさま

ブルナ・ルカーシユ

ざまな情報が読者に提供されるなど、日本の女性教育の発展について繰り返し紹介されていたことがわかる。興味深いことに、いち早く日本と外交関係を結び、多方面の交流を始めた西欧諸国や米国のみならず、例えば、当時オーストリア＝ハンガリー帝国の支配下に置かれ、一九世紀末に来日した二、三人の旅行家を除けば日本との交流を一切持たなかった中欧・チェコのメディアでも、二〇世紀初頭から日本女性の社会進出や女性の就職、教育制度や女性解放運動をめぐる報道がたびたび行われている。これらの記事においてどのような事情が伝えられ、それにより、日本の女性教育についてどのようなイメージが描き出されたのだろうか。

言うまでもないが、日本をふくめ、女性教育の問題が盛

んに扱われていたのは、女性雑誌と教育関係の逐次刊行物である。その中で、例えば、オーストリア＝ハンガリー帝国でもっともよく講読されていた女性雑誌の一つとされる『女性の世界』(Zensky's world)に、一九〇四年二月二〇日に掲載された次のような記事がある。

比較的短期間で欧州文化のほとんどあらゆる成果を修得し、自国の文明や教育も驚くほどに向上させた日本は、教育の迅速な発展のためにまず女性の精神と身体を奴隷状態から解放しなければならぬことを認めており、女性の問題を蔑ろにはしていない。数多くの女学校や専門学校において、女性が精神の教育を与えられている。また、欧州や米国で多数の日本人女性が医学や哲学その他の分野を学んでおり、帰国後に母国の文化事業に大きく寄与していくに違いない。¹⁾

後半は新しい女性教育の支持者として春子皇后を紹介した十数行ほどの短い記事であり、女性教育の現状についての詳細は一切書かれていないが、女性教育の改革が意欲的に進められていること、高等教育を受ける女性や外国の教育機関で学問を収める女性が増えていることが伝えられ、新しい教育を受けた女性たちが将来に担う社会的役割への

期待も示されている。ただし、日本については新時代の教育が一貫して注目されていたわけではない。同誌には、例えば一九〇四年六月五日に「日本女性の生活から」という翻訳記事が見られる。

日本の少女は子どものようによくはしゃぎ、西洋人の目には、なまめかしく、よくしゃべる、そしてよく笑うお人形さんのように映るが、女性となると、結婚しやすく、その様子が一変してしまう。結婚は時期が早く、恋愛感情や自由判断を抜きに、類例のない親孝行と従順さをもって執り行われている。(中略)小さいときから習う十三種類の髪型の中から、既婚の女性は、たったひとつ、もっとも清楚で、もっとも質素なものしか許されない。(中略)日本の女性はとても閉鎖的な生活を送っている。外国人との交流を避けているばかりではなく、日本人同士でも交流しないで、夫の付き添いがなければ家を出ない。²⁾

東洋の女性を(もの)として見る西洋人のオリエンタリズムを強く思わせる言いが多用される記事であり、同時代の変化を完全に無視して、我を捨てて夫に尽くす「良妻」としての日本人女性のイメージを描き出している。自分を

裏切った相手に見立てた藁人形を釘で打ちつけるという丑の刻参りも紹介され、執念深さが日本人女性の持つ性格の一面として説明されているが、全体として、家事と子育てに従順に背負う、個性を持たず、自立を求めない女性が、日本人の理想像として紹介されている。

近代日本の女性教育をめぐる報道はその後増えていくが、必ずしも好意的に評価されたわけではない。女性解放運動の一拠点となる『女性の世界』と異なり、保守的なカトリック雑誌である『チェコ人』(Cech)に一九〇九年四月二五日に掲載された「日本の女性教育」では次のように書かれている。

(前略)ミヤカワが言うには、西欧の文化を迅速に身につけようとしている日本人は、日本の女性教育がこれまでと変わらないかたちで受け継がれることを頑なに守らなければならない。ミヤカワは、女性教育不要論を唱える同胞の意見を支持しないが、西洋の教育は女性を家庭から切り離し、その結果、家庭の墮落を誘発していると主張する。日本では、家庭が何よりも重要視されている。家には常にかつての春風を感じられないといけない、という言い方が日本にあるが、この言葉に、日本人の心に強く根差している家庭幸福の理

理想像が表現されている。この理想を実現させるためには日本の女性は様々な道徳を持ち合わせなければならない。叡智、慎重さ、優しさと謙虚さがそれである。日本人女性のもつとも重要な美德は、家庭や家族の伝統への献身的な忠誠心と自制心である。(中略)二〇年ほど前に、日本は西洋に倣った女子学校を設立するという愚直な決断をした、とミヤカワは述べている。これらの女子学校を卒業した女性は結婚後に極めて悪い妻となり、悪い母となった。裁縫もできず、家政を取り仕切ることができなかった。さらに、教養というものには彼女たちを身内から遠ざけた。日本の慣習として、女性は自分自身の親戚より夫側の親戚を敬わなければならない。このような新しい慣習が生まれた結果、日本社会は女性教育を敵対視するようになった。(中略)今の日本の女性教育は、愛国心を養うとともに、女性をよい妻と良い母に育てることを唯一の目的とするものとして構想されている。³⁾

この記事は、冒頭にも記されているように、ドイツ雑誌『進歩の記録』(Dokumente des Fortschrittes)に掲載された、日本の家政学の先駆者とされる宮川スミによる記事をもとにして書かれたものである。家庭を中心とした旧来の保守

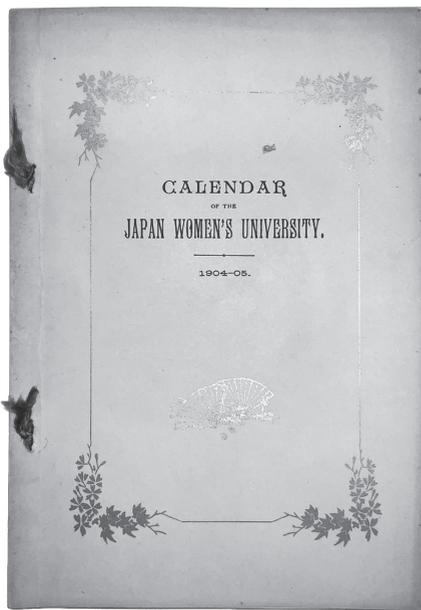


図1 Calendar of the Japan women's universityの表紙（日本女子大学成瀬記念館所蔵）

的な女性教育の基盤となる良妻賢母の精神が最大の美徳として評価され、近代以降の新教育は排除すべき弊害として批判されている。二〇世紀初頭のカトリック系の男性評論家たちの発言をみると、女性の教育や社会進出は家庭崩壊の一因になりかねないものとして疑問視されることが多かったが、ここでも筆者のそのような立場が明確に示されていると言える。

日本の女性教育について報道した記事は他にも見られるが、教育機関として盛んに紹介されたのは、一九〇一年に創立された日本女子大学校であることに注目したい。例えば、一九〇五年一月五日発行の『女性の世界』に掲載さ

れた「東京の女子大学」⁽⁴⁾では、日本女子大学校についてひじょうに詳しく説明されている。「真つ白な表紙に銀色の花と扇子の模様が施され、紫色の紐で飾られる小冊子」という形態を持つ、日本女子大学校が海外向けに刊行した英語の「公式な年間報告」から情報を得た、と冒頭に説明されているが、これは同年刊行の『日本女子大学校の年間行事』(Calendar of the Japan women's university)⁽⁵⁾のことであろう。

この紹介記事は、「日本は矛盾の多い国として知られ、その優れた文化にも皮相的な面がある」と冒頭から近代日本に対してやや批判的な見方が示されているが、「新しい時代において女性教育にも相応な関心が示されている」ことを指摘し、その代表例として「最近東京で創立された私立の女子大学」を紹介している。

学校生活の年間行事——セメスターは欧州のどこの大学より長いことについて驚異を示している——、学校の歴史や皇后より二〇〇〇円の支援金を贈られたこと、学校の構成や授業の内容など学校の諸事情が広範に説明されている。受講生に三〇歳以上の東京市民の保証人が必要であることや、受講生の振舞いは学外でも校則により規制されていることが、他国に類例のない点として特記されていることも興味深い。

日本の娘たちが将来において、女性として、妻として、それから母として自分の責任を果たせるため、高等教育を与え、世界の各民族の文明開化をもたらした思想に触れさせることが、大学の理念として校則に記されている。

一七歳の時に大学に入る日本の娘たちは、まずここで一個の人間、女性として教育され、一人前の市民となり、時機が到来したら国益のために社会運営に関与できらるるのに必要な知識を学ぶ。

記事の末尾で、日本女子大学校は学生の身体の健康にも力点を置いていることが注目され、「貧相で不健康な女性には、自分自身の不幸の種であるばかりでなく、細君として、または主婦として担う家庭にも不幸をもたらす。その病理の遺伝を受け継ぐ子孫、そしてその結果、社会全体がさらに大きな危険に晒されている」という初代校長成瀬仁蔵の訓告も紹介されている。このような日本女子大学校の教育実践を、記者は「私たちの世界でも充分に通用する」とのと評価し、「試験に合格し学位を持つ」ことが最大の目的とされる現今は「礼儀正しい市民、本来の意味での人間、自分の仕事の重要性を理解し、将来の任務をよく心得る女性がいかにして育成されるか」という問題については「私

たちの娘たちが日本の知恵を借りてもよいだろう」という結論を導き出している。同時代の中欧の女性教育をみると、自立自営に繋がる実用的な生活能力を持たせることが目的であったが、経済的に恵まれた上流・中流社会出身の受講生が多い日本の場合はそのような必要がなく、むしろ人格涵養が重要視される、という点が注目されているわけである。しかし、女性の社会進出がそもそも許されていないということから、教育の実用性が軽視されるという日本の女性教育の方針への批判として見ることもできよう。なお、日本女子大学校の紹介記事はその後にも複数確認できる。⁽⁶⁾

上記の説明からも明らかのように、女性解放運動が勢いを増し、女性教育もまた重大な社会問題として認識され、盛んに議論されるようになった二〇世紀初頭のチェコで、多くの女性記者や評論家が外国の事情にも注目し、それぞれの特徴や相違点に焦点を当てながら紹介を行った。日露戦争の影響により同時代の日本の現状がようやく西洋人の関心を引くようになったことも、日本の教育問題を扱う報道が増える一因として考えられる。

本稿が注目する女性旅行家B・M・エリアーシヨヴァーも本来は女性教育者であり、一九〇四年からチェコ女性生産協会 (Ženský výrobní spolek český) の付属校である高等商工業女学校 (Obchodní a průmyslová škola) で英語の講師

として教鞭を執っていたが、彼女には、日本の高等教育や日本女子大学校をめぐる紹介記事に触れる機会があっただろうか。確証はないが、教育者ばかりではなく、創作意欲もあり、女性雑誌に旅行随筆や短編小説を寄稿していたこと、日本女子大学校の最初の紹介記事が掲載された『女性の世界』は女性雑誌として人気が高く、エリアーショヴァーが恩師として敬愛した高等商工業女学校の校長J・クフネロヴァーがこの雑誌に深く関わっていたことなどを考え合わせると、少なくともその一部が彼女の目に触れた可能性は充分にある。日本の女性教育を紹介したこれらの記事が、女性教育者である彼女に、日本への関心を促した刺激の一つとなったかもしれない。

これらの記事に接していたか否かはともかく、一九二二年に初めて来日したエリアーショヴァーは、日本の女性教育に強い関心を示し、そして、ある人との出会いを契機に、日本女子大学校に足繁く出入りするようになった。「若さ」と「詩情」に溢れる目白の女学校は彼女にとって思い入れの深い特別な場所となり、再来日した際にも、つねに心地よい緊張感に胸を膨らませながら目白の坂を上ることが一度ならずあった。

「ある人」とは、日本女子大学校の卒業生であり、教員であり、のちに学長を歴任した生物学者の大橋広のことで

ある。大橋はエリアーショヴァーを日本女子大学校に案内してくればかりではなく、彼女を多くの日本の文化人とも引き合わせてくれた。大橋の心温かい友情と援助がなければ、エリアーショヴァーの一度目（一九二二—一九二三年）と二度目（一九二〇—一九二一年）の日本滞在は大きく異なり、日本滞在を通して形成された彼女の日本趣味や日本観も、まったく別なものになったに違いない。そう考えると、大橋広との交流は、エリアーショヴァーの活動を考えるうえできわめて重要な点である。本稿は、大橋広との交流を中心にエリアーショヴァーと日本女子大学校の関係について検討し、大橋広との出会いや日本女子大学校で過ごした時間が、エリアーショヴァーにとってどれほど刺激的なものであったかを明らかにしていく。

二、詩情と陽気に溢れる目白の学校

一九二二年八月に初めて来日したエリアーショヴァーは、日本で頼れる知己が一人もいなかった。教員時代に世話になり、前年に急逝したカレル大学教授のV・E・モウレクのイギリス人の妻が書いてくれた紹介状があり、そのおかげで来日して最初の一か月ほど、彼女は東京帝国大学英文科教師のジョン・ローレンスの家に身を寄せ、未知の

文化に慣れ親しむことができた。⁸⁾しかし、独立した生活を送ったかったためか、あるいは西洋的なライフスタイルを離れ、より日本らしい生活に触れるためだったかもしれないが、早くも九月中旬にローレンス家の宅を出て、神田区錦町の神田橋付近にあった日本旅館今城館に移り住んだ。そして、もともとから限られていた旅行資金が底を突きはじめたため、直ぐに仕事探しに取り掛かった。この頃からエリアーショヴァーは独自に人的ネットワークを構築し、一年ほどに及ぶ日本滞在を通して多くの日本人と交流を持つことになった。晩年に神経質な偏屈者と噂され、知人からも敬遠されたエリアーショヴァーだが、この時期にはそのような様子はまったくなく、新しいことばかりの日々の生活を思う存分味わいながら、日本人との交流を楽しんだ。その中で、彼女の人生を変えるものとなったのが、大橋広との出会いであった。

大橋と出会った一九一三年に、一八七四年生まれのエリアーショヴァーは三八歳であり、大橋より八歳年上であった。しかしエリアーショヴァーは、日本では一八八一年生まれとしており、現存する複数の旅券の中に一八八一年の生年が記されたものもある。戦後に市役所からこの件について取り調べを受けた際、初来日を前に、旅券申請のために発行してもらった生没名簿の写しに間違いがあり、再発

行の時間がなかったため、一八八一年と記載された旅券を発行してもらった、と説明している。しかし、仮に旅券にこのような経緯で誤情報が記載されたとしても、日常生活において自分の年齢を詐称する必要はあっただろうか。ないように思われるが、じつのところ、エリアーショヴァーは初めて来日したときも、再来日したときも、一八八一年生まれを押し通した。自分の年齢を認めたくない女性の見栄と見ることもできるかもしれないが、大橋広その他の日本人との交流がその動機の一つだったのかもしれない。つまり、大橋と同世代であれば、上下関係を意識せずに付き合うことができると思えば、旅券の記載される誤情報に「便乗」して、自分を「若返らせた」とも考えられる。

一八八二年に岡山県倉敷市に生まれた大橋は同志社女学校に学んだが、親の判断に従って退学し、大橋孝平と結婚した。しかし、長男が誕生して間もなく離婚し、一九〇一年に日本女子大学の英文学部予科に入学、卒業後に教育学部第二部博物科に進んだ。卒業後、生物学研究室の助手となり、一九一四年に助教授、米国のシカゴ大学での留学を経て一九二七年に教授になった。女性教育者や生物学研究者のみでなく、婦人平和協会の理事を歴任するなど、社会活動にも注力した。エリアーショヴァーが、卒業後間もない、生物学研究室助手の傍ら同窓会桜楓会幹事を務めて

いた大橋と知り合ったのは、一九一三年二月一日のことである。この日、エリアーショヴァーは以前から親交を結んでいた、大橋の従弟での中に政治家となる星島二郎に、小石川にある大橋の家に案内された。「大橋さんは留守だった、彼女を驚かすため私は二階に通され、彼女の帰りを待った。小さいが、とてもかわいい和風の家だった。サプライズの催しが済んでから、一階の部屋で琴を弾きながら歌を歌い、夜遅く帰った」と、エリアーショヴァーはこの日の出来事について日記に書きとめている。二人の交流はこのようにして始まった。

エリアーショヴァーは前年の一月から英語の非常勤講師として東京の通信官吏練習所に勤めていた。⁽⁹⁾六〇円の月給により少し余裕ができたためか、休日や授業のない日は、上野の博物館や美術館を訪れたり、両国国技館で相撲を観戦したり、活動写真館に映画を観に行くなどしていた。横浜に在住していたチェコ出身の実業家 J・ホラや来日中の旅行家 J・ハヴラサ夫妻を訪問することもあったが、多くの時間は日本人の知人らと過ごした。このような忙しい日々を送っていると母国を想う時間もなかったように思われるが、じつはそうではなかった。父母を若く亡くした孤児として育てられた彼女は母国を一切顧みないコスモポリタンではなく、突如として故郷への郷愁に襲われることも

あった。

夜中に旅館の警報と路上から聞こえてくる太鼓の音で起こされた。また近くに火事が起きたのではないかと思った。途端に「プラハに帰りたい」と痛切に思い、叶えられないこの願いは私に深い郷愁をもたらした。このようなことが、これまでこの国で、いったい何度あったのだろう。人間はあらゆることに対して代価を払わざるを得ないが、私もまた、自分の体験や東洋のエキゾチックな美しさに浸るひとつひとつの瞬間に対して代価を払わなければならぬ。時々、自分は追放でもされているように思われる。完全には理解し得ない、自分とは完全に違った人たちに囲まれるこの国では、全ては異質で不可思議でならない……しかし、このようなことも体験しなければならぬ。⁽¹⁰⁾

三月一〇日の日記に書き記された感想である。エリアーショヴァーは二月二〇日に「焼失家屋千五百戸、大廈高樓悉く灰燼」と報道された西神田の大火に遭遇し、夜中に避難を余儀なくされたその「恐ろしい夜」についても日記に詳しく書き記しているが、繰り返し起こる地震と火事がもたらす恐怖と不安が、彼女に生まれ故郷や勤務先の高等商

工業女学校の学生、教員の仲間を思い出させたのは無理もないことだろう。因みに、エリアーシヨヴァーは一九二三年九月一日に横浜で関東大震災を経験したが、その時も、死を覚悟しながらしきりに母国に思いを馳せていた。¹³⁾

自分一人の力で幾度も世界を一周したエリアーシヨヴァーでさえも望郷の思いに打たれることがあったわけだが、その際に彼女を良き友として支えたのは大橋広ら日本人の友人たちであった。大橋と知り合って一か月後、大橋に招かれてエリアーシヨヴァーは初めて日本女子大学の門をくぐった。「今日は日本でもっとも面白くもっとも美しいところを知った。「楓と桜の学校」とも呼ばれる日本女子大学のことだ」と、女性教育に長年に携わった教育者の記憶が蘇ったか、この日の感銘を日記に記している。この日、教員の大橋と笹木¹⁴⁾に大学の各施設を案内され、授業に覗きに行き、最後は寮舎で夕飯をとってから、「もっとも美しい印象を抱き、女性教員と女学生たちに見送られながら」夜九時頃に帰った。自然豊かな日本女子大学のキャンパスを勤務先の女学校と比較して「私たちの学校マシオンはどんなに暗かっただろう」と述懐しているところも興味深い。

この訪問がことの始まりで、以後、エリアーシヨヴァーは頻繁に日本女子大学に通った。例えば、四月一日に

大橋に誘われ、日本女子大学の卒業式に参加し、四月二〇日に、創立一三周年記念式典に参加した。この際、成瀬校長やピーボック教授の他に、大隈重信侯爵の講義も聞いた。¹⁵⁾

新学年より通信官吏練習所の仕事がなくなり、時間に余裕ができたため、もともと生花に強い関心を持っていたエリアーシヨヴァーは大橋に懇願し、その尽力で、日本女子大学の華道講座の聴講が許された。四月一日から、エリアーシヨヴァーは毎週火曜日に他の学生とともに嘱託教師児島文茂の指導の下で池坊華道を習うことになった。その後の日記をみると、授業で説明される華道の基本概念についてのメモや、「今日は、つぼみのあるつつじの長い枝をとでも上手に生けた。二回目とき、児島さんはただ「よろしい」といって、いつさい直さなかった。稀にあることだ。」(四月二二日)と、講師の励ましの言葉まで書き記し、ときに「先生は眠そうなきがよくある。壁の横にある自分の座布団に坐り、微睡んでいる。学生は隣の部屋で平気な顔をして、先生を起こさないように誰一人音を立てないようにしている。笑ったり嫌味を言ったりする人ももちろんいない」(六月五日)という微笑ましい授業風景の描写も見られる。¹⁶⁾

エリアーシヨヴァーは日本女子大学によく通ったが、

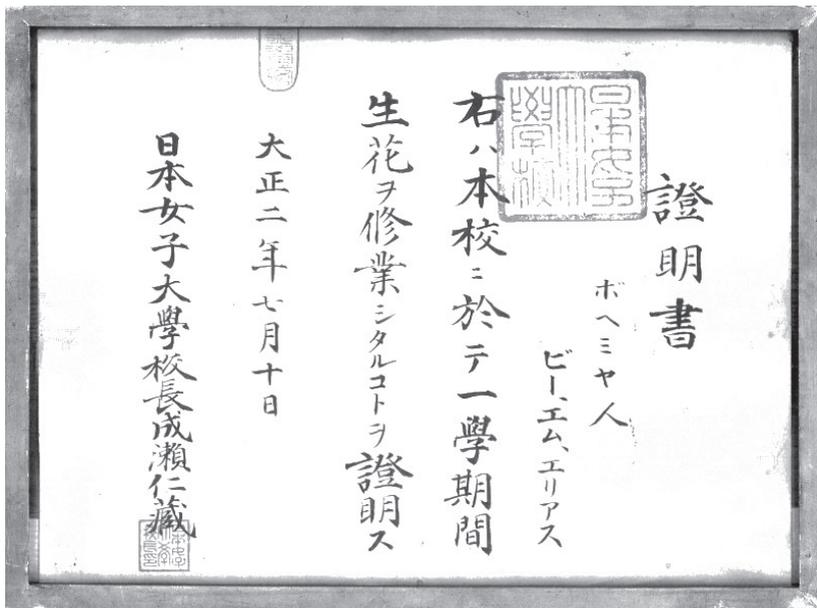


図2 エリアーショヴァーが日本女子大学校で取得した生花の修業証明書
(シュラバニツェ博物館所蔵)

大橋と一緒に出かけるとも多かった。例えば、四月二八日に星島と大橋と講師の児島とともに生花の展示を見に行つて、帰りに大久保でつつじを見た、と日記に記されている。五月六日に大橋とともに日本女子大学の淀野彩が住む「緑の多い、詩情あふれる家」を訪れ、夫の「淀野先生の豊富な石のコレクションと淀野さんの美しく刺繍される絵」を見て感動した。

近代文明の形見である街灯の光が、庭に広がる暗闇をつらぬいていた。どこか近いところで蛙が明るく鳴いていた。周辺の庭から穏やかな平和の空気が流れ込んできた。暗くなった空に何千もの銀色の星が光り輝いていた。そして私の目の前に、暗くても明るく見える藪の中に、鐘形の花の衣をつけた灌木がひとつ枝を広げている。こんなに美しい夜を私はまだ日本で過ごしたことがない。

女性の友人らとともに過ごした静かな晩——このような平和な時間は異邦人としての不安や寂しさを追い払い、心に深く刻まれる幸福のひとつであった。

六月一日に、エリアーショヴァーは、また大橋とともに、日本女子大学校出身の出野柳が家庭教師を務める故人西徳

二郎男爵の宅を訪れている。六月八日、大橋と笹木と上野公園の洋画の展示会を訪れた際に、公園で「一三歳の美少年」に見えた迪宮皇太子（のちの昭和天皇）の姿を見かけた。六月二〇日、大橋に誘われ、笹木、星島二郎と夕食をし、英語、ドイツ語、チェコ語と日本語の歌を歌いあつた。「帰るとき、提灯なんていらなかつた、お月さまは、綺麗に光っていた、ああ、日本のお月さまはなんてすてき」と日記に記している。

これらの日記の記述からも分かるように、日本女子大学校はエリアーショヴァーにとつて、色褪せない魅力を持つ場所となつた。日本の女性教育を批判的に見ることもあつたが、日本女子大学校について「軍隊式の硬直さはどこにもなく、教室にせよ運動場にせよ、どこもかしこも明るい若さが花開き、背を伸ばしている」（五月二三日）とその自由な校風を高く評価していた。一方、大橋や笹木、あるいは日本女子大学の学生の目には、孤児と生まれ育ちながらも自分ひとりの力で教育を収め、学校教員という職を手にし、さらにその社会的な地位を顧みずに、単独で世界旅行を決意したというエリアーショヴァーが、男性に頼らず自立自営を貫く新しい近代女性のお手本に見えたのではないだろうか。

エリアーショヴァーは日本女子大学校を愛したもう一つ

の理由は音楽であつた。自分が生まれ育つた環境と異なり、日本はどこに行つても音楽や歌声が聞こえないことに対しエリアーショヴァーが日記でも、新聞記事や著書の中でも繰り返し不満を表している。例えば、一九一三年五月一八日に通信官吏練習所で知り合つた学生に誘われて千葉の瑞沢村を訪れたが、その時の印象を後年に次のよう書き記している。

静寂、どこもかしこも無音の静寂。私の母国であれば、家の中からも、谷や山の野原からも、歌声が聞こえるだろう、と懐かしく思った。そこは家畜を放し飼いで、ヤギやヒツジの鈴も、犬の吠え、羊飼いの笛も幾重のこだまをなして鳴り響くだろう。しかし、ここにはそのようなものがない。家畜がないし、人は黙っている。⁽¹⁾

「日本人は感動を詩のかたちで表現できるが、歌で表現することはできない」とこの時に嘆いたエリアーショヴァーにとつて、日本女子大学校はそこが違つていた。「またしても心地よい午後を大学で過ごした。ここでは、東洋の美はさらに音楽と歌で飾られている。日本のどこに行つても欠けている音楽と歌で。」（六月一〇日）という記述から分か

るように、授業やキャンパス内に聞こえる音楽や学生の歌声が日本女子大学校に好意を寄せる重要な一因であった。若さ、陽気さ、音楽——それこそはエリアーショヴァーが受けた日本女子大学校の印象であった。

六月に入ると、「晴れた、花の帝国をあとにするのは、心苦しい」と思いながらも、エリアーショヴァーは、帰国の準備に取りかかるほかなかった。六月二四日に、成瀬校長と面会し、「お一人で地球を渡り歩く貴嬢には世界が狭いだろう」という言葉で送り出されたという。七月の初め、帰国の直前に彼女は京都を訪れることにしたが、その前、日本女子大学校の友人らが送別会を開いてくれた。そして、京都に発つ七月六日に大橋と笹木が東京駅まで見送りに来てくれた。エリアーショヴァーは「これ以上親切な友人、これ以上心温まる送別を私は想像できない」と、この日の日記に書き記した。七月一七日にエリアーショヴァーは「日本でもっとも好きで、プラハと同じくらい熟知している、いい友だちがいるから居心地がとてよくて、美しい花がいつも咲いている」という東京をあとにして、日本を去った。

三、エリアーショヴァーが描いた日本女子大学校

ここまで一九一三年の日本滞在中に記された日記を頼りに、エリアーショヴァーと大橋広の交流の軌跡を辿ったが、この出会いがエリアーショヴァーに強い刺激を及ぼしたことを、彼女の新聞記事や一九一五年に刊行された旅行記『日本人との一年』からも容易に確認できる。

エリアーショヴァーは日本から、日々の生活の断片や日本文化についての感想をまとめた記事を母国の新聞雑誌に投稿し、帰国後もこの活動をつづけた。女性解放運動に積極的に関わったという経験を持つ女性教員であり、来日前から『女性の雑誌』(Ženske listy)を中心に執筆活動を展開したエリアーショヴァーが日本から寄稿した記事の大半は、「日本の女性が何を着るか」、「日本の料理」や「日本の結婚式」というタイトルからも分かるように、日本女性の生活から母国の女性読者の関心を引きそうな題材を選んでいる。J・コジェンスキーやJ・ホロウハなど一九世紀末に日本を訪れたチェコの男性旅行家たちが日本人の生活や文化全般を紹介しようとしたのに対して、エリアーショヴァーは日本女性の生活に目を向け、様々な側面を解説しようとしたと言えよう。これらの記事の中には、日本女子大学校や大橋広との交流に言及したものを複数見られる。

一九一五年にエリアーショヴァーは『日本人との一年』*Rok žitvoia mezi Japonci* (Praha: Barbora Markéta Eliášová, 1915) という旅行印象記を自費出版した。従来の旅行記に見られる、文献調査を踏まえた日本文化や歴史などの解説はほとんどなく、あくまでも生活の断片や日々の経験、一年におよぶ滞在を通して目に映った「日本」の姿を印象派風に描き出したものである。情報源としての側面を重視した従来の日本旅行記とは大きく異なるが、「日本を新しい角度から捉え、日本人の家庭の生活を、そして日本人の社交生活のいくらかを照らし出している」¹⁸⁾点が出版当初に一定の評価を得た。本書の後半では、日本女子大学校や大橋広との交流について、日記の内容を踏まえながら詳しく説明している。

まず第二章では、「厳密に言えば、西洋の大学とは異なるが、日本人女性もまた東京に「大学」と名付けられる高等教育機関を有している」¹⁹⁾という書き出しで、日本女子大学校のカリキュラムや学生生活の内容、成瀬仁蔵の略歴などが紹介されている。本校へのアクセスを得たきっかけについて「ある日本の家でこの学校の卒業生であり、また今はここで教鞭をとっている大橋さんと知り合い、彼女ののおかげでこの面白い学校を詳しく知ることができた。あらゆる建物、教室や学生寮を見せてもらい、また大学の社交

行事にもよく招待された」と述べ、「社交行事」の一例として日記にも記載のある卒業式が紹介されている。²⁰⁾

エリアーショヴァーは神田の今城館から日本女子大学校に通ったが、その際に市電で江戸川橋まで行き、ここから目白の坂道を上るのが常であった。江戸川橋を渡ったあたり、「寒いときは青色の制服、暑いときは白い制服を着た警察官がいつも忠実に突っ立っていた」が、「ここで散文の世界が終わり、この先に小石川という詩の世界が広がる」とエリアーショヴァーが述べている。そこに、日本女子大学校への彼女の思い入れを窺い知ることができよう。

日本の花や花をめぐる日本人の美意識、池坊華道の基本が紹介される第二章では、日本女子大学校で受けた華道の授業についても回想している。

この学校はとても面白く、驚きも多かった。もっと詳しく知りたかったので、華道の授業を受講させてくれるように頼んだ。(中略)この願いは学校側を少し困らせた。なぜなら、外国の学生はまだここで授業を受けたことがない。数日間、判断を待たなければならなかったが、結局は私の願いを受け入れてくれた。それで私は、日本でもっとも楽しい時間をこの理想的な学校の世界で、礼儀正しく振舞う活発な女性たちに囲ま

れて過ごすようになった。

既に一九〇七年に日本女子大学校に中国の留学生が勉強しているが、ヨーロッパ出身の「留学生」としてはエリアーショヴァーが最初だったのだろう。⁽²¹⁾ 正規の学生ではないし、日本語もまだ流暢に話せないことを考えると、学校側に戸惑いがあったのは無理もないことだろう。

本書の第二八章では、一九一三年四月二〇日に開催された創立一三周年記念式典で大橋に紹介してもらった牧野夫人の宅を大橋と淀野と三人で訪れた時の様子、第三〇章では、大隈重信侯爵の小石川の邸宅を大橋と二人で訪問した時の様子が描かれている。この章で大橋の略歴も説明され、「閉ざされて、容易に開くことができない門まで、まるで魔法の杖でも使うかのように、自分のために開いてくれた」と、大橋の友情と援助への感謝の気持ちが表示されている。

このように、『日本人との一年』の後半に大橋をはじめ日本女子大学校の友人たちが繰り返し登場することから、彼女らとの日々の交流がエリアーショヴァーの日本滞在を彩るものだったことが分かる。

日本女子大学校や大橋広については、エリアーショヴァーはその前後に雑誌新聞の記事でも紹介している。例えば、一九一六年一月一六日に「日本女子大学校で」⁽²²⁾と

いう記事を發表し、日本女子大学校で過ごした時間や華道授業について、講師の児島の授業中の居眠りを含めて紹介している。⁽²³⁾

小石川は東京のもっとも美しい村の一つである。(中略) 小石川はとてもロマンチックなところだ。坂一谷——坂一谷、全ては緑色の数知れない濃淡に美しく彩られ、その中に大きめの鳥籠に見える人家が点在している。大きな坂の頂きとその斜面、広大な谷あい、女子大学校のキャンパスが占めている。(中略) 本校の最大の目的は、少女らを聡明な妻と母に育てることであるが、それでも、女学生という日本の新しい女性像を、氣にくわない、怪しからぬ、でなければ滑稽なものとする社会の偏見と闘わなければならない。

日本の女性教育は社会進出ではなく、家を担うべく良妻賢母を育てることを目的としている——同様な指摘は他のエリアーショヴァーの記事にも見られるが、女性の自立自営に必要な実力を養うことを目的としたプラハの高等商業女学校との違いを強く意識していたことがわかる。そして、このような保守的な教育でさえ、世間から批判される点にもエリアーショヴァーは繰り返し注目した。早くも日

本滞在中に書かれた「ノブコさん」⁽²⁾という記事の中に「日本でもっとも困難なのは女性問題の解決である。女性を解放し、考えることと自分の意見を持つことを許すことに対しては、他の点なら西洋の文化を全面的に受け入れている若い男性たちでさえも反対している。彼らは女性に、美しく、敬虔で従順な家財道具であってほしいと思っている。彼らが言うには女学生は高慢であり、その大胆な歩き方や自信に満ちた眼差しに反感を持っている」と、男尊女卑の精神が未だ蔓延る日本社会を辛辣に批判している。

エリアーシヨヴァーはさらに一九一七年に「大橋さん」という文章を発表している。星島次郎に大橋広の家に初めて案内されてから、「このこじんまりした家の竹の木戸を何度もくぐり、いつも親切に歓迎された」こと、笹木が作ってくれた料理を楽しみ、大橋と笹木の琴にいく度も聞き惚れたことを懐かしく思い返している。「大橋は最初、小柄で、日本人らしくいつも親切に微笑み、寡黙で、目立たない日本の女性に見えた。しかし、私は直ぐに、彼女は強くて大胆な女性であることを知った」と、交流が深まるにつれて初対面の印象が大きく変わったことを説明している。大橋から父の家で過ごした屈託のない幼年時代についてよく話を聞いたが、不幸な結婚生活や離婚について聞いても大橋がいつも口を噤んだことも思い返されている。

自分は日本女子大学校で学生の身で華道の授業を受けるようになったとき、大橋が学生にどれほど慕われているかをよく知った。(中略)大橋さんはいつもアドバイスをし、親切な表情で、微笑みながら人を助けた。まるで自分の心は幸福でいっぱい、その余ったところを人に与えるかのように。しかし、ほんとうは、心の奥底に崩れ落ちた家庭幸福の残骸を隠し持っていた。(中略)彼女の竹の家はよく友達でいっぱいになった。心温まる音楽の会が催されることもあった。彼女の琴の絹の線はときどき、彼女が語りたくなかった、力強い心のもっとも深いところに隠し通した事柄を表しているかのように聞こえた。しかし、それは私の聞き違いだったかもしれない。日本の音楽にはもともからの思わし気なところがあり、二度と戻らぬ過ぎ去ったことをめぐる悲しい会話のように、失われたものへの哀愁で覆われている。

自分にとって無二の友となった大橋広の強さに関心し、その不幸に心を強く動かされたエリアーシヨヴァーの心情が素朴に表現されている。一生家庭を持つことなく、独り身の寂しさを身に染みて感じるのが往々にあったエリアーシヨヴァーだけに、自分自身の境遇にも通じるところ

をそこに見出したのだろう。互いの不幸が二人の絆を強くしたかもしれない。

四、その後の交流

一九一三年に親交を結んだ二人の交流はその後も続いた。一九二〇年にエリアーショヴァーは再来日し、チェコスロヴァキアと日本との間に外交関係が正式に締結されるにもなつて東京で新設されたチェコスロヴァキア公使館に事務職員として勤務することになったが、一年半におよぶ滞在を通して彼女は大橋広や佐藤篤子、網野菊など日本女子大学の教員や卒業生と盛んに交流した。一九二三年にエリアーショヴァーは三度目の来日を果たした。他の旅行については、断片的ではあるが、自筆日記が残されており、その中から旅行中の動向を辿ることができるとも、一九二三年の日本滞在中にエリアーショヴァーは横浜で関東大震災に遭い、日記その他の資料もすべて焼失してしまつたため、震災前の彼女の生活や交流については不明な点が多い。この時、大橋広は米国に留学中で会うことはなかつたが、震災直後に書かれた日記をみると、日本女子大学校英文科出身で作家の網野菊との交流があった。一九二九年にエリアーショヴァーは最後の来日を果たし

た。四度の日本滞在のなかでもっとも短く、わずか二カ月半の滞在であったが、この間にもエリアーショヴァーは網野菊と盛んに交流した。

一九二〇年代のエリアーショヴァーと大橋広その他の日本女子大学の関係者との交流については続稿で検討する。

【注】

- (1) M. W. Japonsko. *Ženský svět*. 1904, 8(4), p. 50.
- (2) *Ze života japonských žen*. *Ženský svět*. Trans. M. Havelková. 1904, 8(11), p. 141. 記事の末尾に「ロシア語からの翻訳」と付記されているが、出典については明記されていない。
- (3) *Výchova japonské ženy*. *Čech*. 1909, 34(114), p. 10.
- (4) *Ženská univerzita v Tokiu*. *Ženský svět*. 1905, 9(21), p. 292.
- (5) *Calendar of the Japan women's university*. [Japan women's university]; [1905].
- (6) 『チェコの啓蒙』(Česká osvěta)に掲載された「東京の女子大学」においても日本女子大学校が「学位や免許を取るためではなく、女性が精神の高度成長を達成できる女性的高等教育機関」(R. A. er. *Ženská univerzita v Tokiu*. *Česká osvěta*. 1906-1907, 3(1-10), p. 111) と紹介され

『ピルゼン日報』(Plezeńské listy)にも「日本女子大学」(Japonská ženská univerzita. *Plezeńské listy*: 1908, 44(263), p.5)とどう記事を確認できる。さらに家庭雑誌『家庭の幸福』(Šťastný domov)にも、似通った内容を記した「日本女子大学」(Japonská ženská univerzita. *Šťastný domov*: 1909, 5(9), p.211)が掲載されている。

(7) エリアーシヨヴァーの女性教員時代やJ・クフネロヴァーとの関係については拙稿「忘れえぬ人々——女性旅行家 B・M・エリアーシヨヴァーの初来日の背景」(『実践国文学』二〇二二・二〇)を参照していただきたい。

(8) V・E・モウレクとJ・ローレンスとの交流については注7に挙げた論考において詳述した。

(9) ナーブルステク博物館に保管されているエリアーシヨヴァーの日記 (Archiv Eliášová 34, Náprstkovo muzeum)。なお、エリアーシヨヴァーは日記のなかではチェコ語の表記を使用し、姓のみで名を書かないため、人物の特定が困難な場合もあるが、本稿では特定可能な人物に関して漢字の表記を使用し、特定が難しい場合は片仮名の表記を使用する。

(10) エリアーシヨヴァーは一九二二年一月四日に病気で休職中のジョーンズ夫人の後任として採用されたことを記している。勤務時間は九時半～一一時半で、翌年二月

二八日まで本職をつとめた。

(11) Archiv Eliášová 3-5, Náprstkovo muzeum. 以下同様。

(12) 「西神田の大火」(『東京朝日新聞』一九二二・二二)。

(13) エリアーシヨヴァーは関東大震災の経験について複数の新聞記事を執筆しているが、例えば、「燃え盛る街での三日間」(B. M. Eliášová. *Tři dny v hořícím městě. Pestrá příloha Venkova*. 1926, 21(292), p.17)では、「すべては言え表せないほど悲しかった。今日でみんな死ぬ、と人々が口々に言った。これまで死にたいと思ったこともある。しかし、死を身近に感じる今こそ、私はこれまでにないほど強い、生きる意志を感じた。体は疲れ果てていたが、頭ははっきりしていた。母国を思い浮かべつづけていた。遥かなる、とても帰れそうにないその母国を。」と震災直後のことを思い返している。

(14) 一八八三年に宮城県に生まれる。一九〇二に日本女子大 学校家政学部に入學し、卒業後に同校で料理の助手を務める。著書に『年中行事家庭儀式料理』(桜楓会出版部 出版、一九一・一七)がある。

(15) この際にエリアーシヨヴァーは大隈と談話する機会があり、大隈の自邸に招待された。帰国の直前、七月一日に大隈の宅を訪れ、本人とも懇談した。

(16) エリアーシヨヴァーは再来日した時も、活花の展示会を

見に行ったり、活花を教えてもらったりしている。一九二〇年代に生花の入門書の出版を目指して稿を起したが、出版には至らなかった。未完の原稿は現在ナールステク博物館に保管されている。

(17) 『日本人との一年』(Rok života mezi Japonci. Praha: Barbora Markéta Eliášová, 1915)。

(18) *Literatura. Národní listy*. 1916, 56(92), p.11.

(19) 西洋と異なる点については詳述されていないが、一九〇一年に「大学校」として発足した本校は専門学校令により専門学校として認可されており、正確に言えば、この時期は「大学」ではなかった。

(20) エリアーショヴァーはまだ日本に滞在していた一九一三年六月一日、『女性雑誌』に「東京の日本女子大学の卒業式」(Slavnost ukončení školního roku na Ženské universitě v Tokiu. *Ženské listy*. 1913, 41(6), p.15) を発表した¹⁾が、これが日本女子大学を紹介した最初の記事となる。

(21) 周一川「中国人女子留学生を受け入れた私立三校について——民国初期を中心に」(『史学』一九九九・五)。

(22) B. M. Eliášová. V Japonské ženské universitě. *Denní hlasatel*. 1916, 26(161), p. 8.

(23) 華道の授業については一九一七年八月に発表された「ニッポンの学校から」(B. M. Eliášová. Z Nipponské školy.

Český svět. 1917, 13(50), p. 15(19)) でも紹介されている。

(24) B. M. Eliášová. Nobu-ko San. *Rozkvět*. 1913, 6(7), p. 201.

(25) B. M. Eliášová. O Haši san. *Ženský svět*. 1917, 21(5-6), p. 82.

付記

エリアーショヴァーの日記その他の資料の翻訳は筆者による。なお、本研究はJSPS 科研費19K13142(研究課題「チエコ女性作家B・M・エリアーショヴァーと日本旅行記・ジャポニズム文学の研究」)の助成を受けたものである。

(ブルナ・ルカーシユ・実践女子大学准教授)